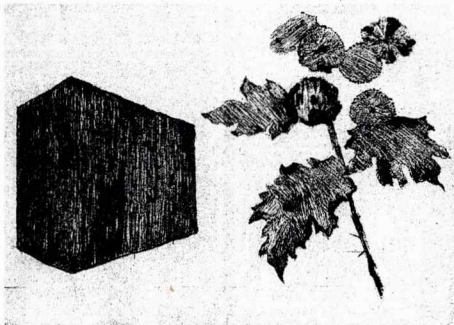


# 朝日歌壇俳壇



〈菊とマンション〉 岩尾恵都子

## 馬場のき子選

春になれば母となる羊百頭が日向ぼこするグリーンの牧場 (前橋市) 萩原 葉月  
 冬銀河輝く夜の保育器の中に小さき生命の鼓動 (戸田市) 蜂巣 幸彦  
 繰り上げて汗の襟受け取れず乾いた襟は涙で濡れる (つくば市) 小林 浦波  
 異国にて消耗品の如くにも戦地に骸晒す兵士ら (松戸市) 加賀 昭人  
 一日の唯一の人の会話をえなくなるセルフレスでの買い物 (武蔵野市) 山口 京子  
 正月三日公園トイレに近いベンチにてパチンと爪切るホームレス一人 (東久留米市) 五十嵐博代  
 「また値上げですか」とすぐさま訊かれたり力レンターを差し出す前に (長野市) 原田 浩生  
 ☆お雑煮を食べつつ家族で抱負言う大人になっても「小さい子から」 (富山市) 松田 梨子  
 ロシア領土を回して飛ぶ欧州便 戦争の余波空にも及び (西東京市) 荒木わたる  
 ゆつくりでいいですよって看護師さんあぁあ (岡山市) 伊藤 次郎  
 私も歳をとったよ

【評】第一首は群馬県渋川市にある伊香保グリーン牧場の春待ちの光景。母となる羊が毎年たくさんいるという。その日向ぼこの盛観。思うだに楽しい。第二首は冬銀河が輝く下の産院の保育器の中の小さな命。幸あれと祈りつつ見入るその鼓動。

## 佐佐木幸綱選

☆スーパリーに行かなきゃ生きていけない山から下りるクマの気持ちだ (横濱市) 菅谷 彩香  
 餅焼いて食いたいなと父ぼつり介護施設で新年迎えて (さいたま市) 秋間由美子  
 年賀状じまいの知らせこの人もメールも知らずつながり消える (神戸市) 石川佳世子  
 正月の五日白魚の解禁日注文先を板に貼りゆく (津市) 中山 道治  
 ☆国境は立て札ひとつその先は急に全員ドイツ語話す (オランダ) 宮沢 洋子  
 いま何処へ帰りたいかと問はれれば雪の剣か患ひてなほ (和歌山市) 岡田 信也  
 やうやくにイルミネーション外されて駅の枯木は芽吹く準備す (下関市) 内田 恒生  
 巳年にちなんで蛇と似たようなイモムシ並ぶ昆虫館に (金沢市) 竹内 二二  
 隣席は電車の揺れを気にしつつ赤ペン入れる若き女教師 (瑞浪市) 柴田 路子  
 パック入りの七草粥セット売れ残り萎れかけたる「すずなすずしろ」 (横浜市) 安達三津子

【評】第一首、必要にせまられての外出。山から出て来る熊を連想した想像力に感心。第二首、介護施設では、喉につまらせないよう餅を出さないようにしている所もあると聞く。第三首、今頃は年賀状じまいの歌が多くあった。

## 高野公彦選

白布巻かれ繭となりたる幼な児よ来世は生れよ載無き地に (桐生市) 村松 正敏  
 わが好きな味と思っていたものは夫の好みと知る一人膳 (水戸市) 吉田千鶴子  
 キャベツ葱エノキも高くてやむを得ずもやしを見れば売れ切れの棚 (東京都) 岩橋戸代子  
 作るより出来るが結果好ましき友だち然り短歌もしかり (横須賀市) 丹羽 利一  
 半分に入浴剤を手で割って大切そうに子のくれた冬 (奈良市) 山添 聖子  
 オリオンを三ツ星うすれゆく夜明け一人暮らしせる息子を思う (福山市) 倉田ひろみ  
 ☆国境は立て札ひとつその先は急に全員ドイツ語話す (オランダ) 宮沢 洋子  
 寒雀ちよちよと道にまかり出で夜勤の老いの掃きかき (さいたま市) 春日 重信  
 ☆お雑煮を食べつつ家族で抱負言う大人になっても「小さい子から」 (富山市) 松田 梨子  
 水仙の葉に微かなる捻りあり半脚思惟像の指先想う (神奈川県) 吉岡 美雪

【評】1首目、いとけない死者の哀れさが「繭」の語から浮かび上がってくる。2首目、食べ物好みを通して、夫との繋がり深さを実感。3首目、野菜の値上がりラッシュの中、つい誰もが安い食品に手を伸ばす。リアルな読み方がいい。

## 永田和宏選

凍滝にそりりそりりと近づけば奥には水の落つる音あり (村上市) 鈴木 正芳  
 ☆スーパリーに行かなきゃ生きていけない山から下りるクマの気持ちだ (横濱市) 菅谷 彩香  
 正月の西日差し込む研究室のなか試薬を1mlずつ分注す (東京都) 井上 智景  
 戦争で知った国名ウクライナ能登もかなしいガザもかなしい (成田市) かとうゆみ  
 人骨を玩具に遊ぶ子どもを瓦礫の街にカメラは捉ふ (大津市) 船岡 房公  
 亡き妻の友へ手紙を書いて知る手紙の文面じつは妻あて (東京都) 藤原あつや  
 鯛多く入りし故に傾きて転覆せしとは初漁の船の (水戸市) 檜山佳与子  
 言ふことを聞かぬばサーカスに売りとばすそんな脅しが昭和にありき (三重県) 藤井 恵子  
 足指から太平洋の縁なぞりバスは何度もカーブを曲がる (岡山県) 小林 和恵  
 跨線橋にぼつり浮かぶ月仰ぐ足もと過ぐる (市川市) 山本 明

【評】鈴木さん、凍った滝に恐る恐る近づくとかすかに水音が。凍ったと見える滝の向こうの息吹。菅谷さん、クマの気持ちがわかるなあと思いつつ何かスーパーまで。襲わないでね。井上さん、私も昔はまさに元日もラボで仕事をしていました。

## 俳句時評 虚子の多面性

岸本 尚毅

虚子生誕一五〇年をしくしくする昨年十二月、坪内稔典著『高浜虚子』(ミネルヴァ書房)が刊行された。この評伝は、正岡子規との関係、雑誌「ホトトギス」の経営、小説・写生文の執筆、文芸の編集者や俳句の選者としての活動など、虚子の多様な面に言及する。

代表句も簡潔に紹介する。たとえば、「日」の移ろいを捉えた「遠山に日の当りたる枯野かな」と「桐一葉日当りながら落ちにけり」は「時間的俳句」。《流

れ行く大根の葉の早さかなは「二つの『の』によって流動感を生じる」。『虚子一代の傑作』だとする「燭々と屋の星見え幽生え」は「見え」「生え」という二つの動詞の連用形が勢いを伝える。《屋裏する我と逆さに蠅叩》を「我と蠅叩を同格にしている」、世評高い《去年今年貫く棒の如きもの》を「駄作中の駄作であることで傑作になっている」と直結していたと考えてよいのではなからうか。

端的に述べた句評は一句に数行。紙幅の大半は、俳句ではなく、小説、編集、経営などの虚子の多様な面に費やされている。こうした虚子の全体像と個々の俳句との関係をどう考えるか。これを十七首に取まらない虚子の大きさと見るか。あるいは、散文の作品も含めた虚子の豊かさが一句に凝縮されていると見るか。

虚子は「選者の仕事に當々と打ち込んだ稀な俳人、いや選者だった」と本書はいう。本書の描き出す人間虚子の幅の広さが、少なくとも選者としての度量には

## 風信

第15回北斗賞 文学の森主催。神奈川県藤沢市の古田秀さん(34)の「ファインダー」(150句)に決まった。若い俳人の輩出を目的にした賞で、40歳までが対象。

中村和弘句集「荊棘」「陸」主宰の第4句集。「人間の影こそ荊棘夜の秋」「張子の岩は燦銀なり初芝居」「深海魚渚に崩れ春暑し」(ふらんす堂・3300円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(編者2作品まで)。QRコードから。